

- 50 . 兄弟たちよ。私はこのことを言っておきます。
血肉のからだは神の国を相続できません。
朽ちるものは、朽ちないものを相続できません。
- 51 . 聞きなさい。
私はあなたがたに奥義を告げましょう。
私たちはみなが眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。
- 52 . 終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。
ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。
- 53 . 朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならぬからです。
- 54 . しかし、
朽ちるものが朽ちないものを着、死ぬものが不死を着るとき、
「死は勝利にのまれた。」とされる、みことばが実現します。
- 55 . 「死よ。
おまえの勝利はどこにあるのか。
死よ。
おまえのとげはどこにあるのか。」
- 56 . 死のとげは罪であり、罪の力は律法です。
- 57 . しかし、神に感謝すべきです。
神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。
- 58 . ですから、私の愛する兄弟たちよ。
堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。
あなたがたは自分たちの労苦が、主において無駄でないことを知っているのですから。

釈義ノート

- 50 . 兄弟たちよ。私はこのことを言っておきます。
血肉のからだは神の国を相続できません。
朽ちるものは、朽ちないものを相続できません。
- Τοῦτο δέ φημι, ἀδελφοί,
ὅτι σὰρξ καὶ αἷμα βασιλείαν θεοῦ 創造されたままの肉体的人間性
κληρονομήσαι οὐ δύναται (= 「土に属している形」 49 節、「朽ちるもの」 50 節)
pr. 事柄の性質上できない
- οὐδὲ ἡ φθορὰ τὴν ἀφθαρσίαν κληρονομεῖ.
滅び 破壊 destruction, death, ruin pr.
- 51 . 聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。
私たちはみなが眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。
- ἰδοὺ μυστήριον ὑμῖν λέγω.

πάντες οὐ κοιμηθησόμεθα, πάντες δὲ ἀλλαγησόμεθα,
fu.pass. fu.pass. (1) change, alter, transform; (2) exchange, give in exchange

5 2 . 終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。

ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

ἐν ἀτόμῳ, ἐν ῥιπῇ ὀφθαλμοῦ, ἐν τῇ ἐσχάτῃ σάλπιγγι .

ἄτομος : 原子 つむる 目

in a moment or instant

σαλπίζει γάρ καὶ οἱ νεκροὶ ἐνεθθήσονται ἀφθαρτοὶ καὶ ἡμεῖς ἀλλαγησόμεθα.

fu.

fu.pass.

fu.pass.

sound the trumpet

5 3 . 朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならないからです。

δεῖ γάρ τὸ φθαρτὸν τοῦτο ἐνδύσασθαι ἀφθαρσίαν

pr.

inf. aor. 着る

necessary, must

καὶ τὸ θνητὸν τοῦτο ἐνδύσασθαι ἀθανασίαν.

5 4 . しかし、

朽ちるものが朽ちないものを着、死ぬものが不死を着るとき、

「死は勝利にのまれた。」としるされている、みことばが実現します。

ὅταν δὲ τὸ φθαρτὸν τοῦτο ἐνδύσῃται ἀφθαρσίαν

aor.

καὶ τὸ θνητὸν τοῦτο ἐνδύσῃται ἀθανασίαν,

τότε γενήσεται ὁ λόγος ὁ γεγραμμένος,

Κατεπόθη ὁ θάνατος εἰς νίκος.

καταπίνω aor.pass.

飲み込む、飲み干す、食い尽くす、押し潰す、overcome, destroy, cause the end of

5 5 . 「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。

死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」

ποῦ σου, θάνατε, τὸ νίκος;

ποῦ σου, θάνατε, τὸ κέντρον;

5 6 . 死のとげは罪であり、罪の力は律法です。

τὸ δὲ κέντρον τοῦ θανάτου ἡ ἁμαρτία,

ἡ δὲ δύναμις τῆς ἁμαρτίας ὁ νόμος .

5 7 . しかし、神に感謝すべきです。

神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。

τῷ δὲ θεῷ χάρις τῷ διδόντι ἡμῖν τὸ νίκος διὰ τοῦ κυρίου ἡμῶν Ἰησοῦ Χριστοῦ.

pr.pt.

直訳：「私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださっている神に、感謝を！」 = 頌栄

58 . ですから、私の愛する兄弟たちよ。

堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。

あなたがたは自分たちの労苦が、主にあってむだでないことを知っているのですから。

Ὡστε,

ἀδελφοί μου ἀγαπητοί,

ἑδραῖοι γίνεσθε,

pr.

sedentary, seated; 座っている hence, *steadfast, firm, settled* in one's thinking or belief.

ἀμετακίνητοι,

immovable, firm

περισσεύοντες ἐν τῷ ἔργῳ τοῦ κυρίου πάντοτε,

pr.pt. まさる、豊かになる、有り余る、増す、あふれさせる

(1) intrans.;

(a) of things; *be present in abundance, exceed, surpass* (MT 5.20);

(b) of what is in excess *be left over, be more than enough* (MT 14.20);

w. dat. to indicate in what respects the abundance is expressed *overflow with, be (extremely) rich in* (2C 3.9);

(c) of pers.; *have an advantage, be better off* (1C 8.8); *have an abundance of, have more than enough* (LU 15.17);

be outstanding in, excel in (CO 2.7);

(2) trans.;

(a) of things *provide for in abundance, cause to increase* (2C 4.15);

(b) of God's working *cause to abound, grant richly, provide a great deal of* (2C 9.8).

εἰδότες ὅτι ὁ κόπος ὑμῶν οὐκ ἔστιν κενὸς ἐν κυρίῳ.

pt.pf.

empty, without content; 手ぶら、何も持たず、価値がない、バカげた

「実質のないもの」15:14

「空しいことばにだまされるな」エペソ 5:6

説教

私たちの救い主イエスキリストさまは、

私たちの罪を贖うため私たちの身代わりとなって十字架で死んだ後、数えて三日目に復活なさいました。

復活したイエスさまは、マグダラのマリヤに現れ、ペテロに現れ、それから十二弟子にご自身を現されました。

肉体の復活を疑いイエスさまの幽霊ではと怪しむ弟子たちのためには、彼らの真ん中に立ってこう言われました。

「なぜ取り乱しているのですか。

どうして心に疑いを起こすのですか。

わたしの手やわたしの足を見なさい。

まさしくわたしです。

わたしにさわって、よく見なさい。

霊ならこんな肉や骨はありません。

わたしは持っています。」 (ルカ 24:38-39)

そして、それでもまだ不思議がっている弟子たちのために、

わざわざその場にあった焼き魚をむしゃむしゃと召し上がりました。

「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、

また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません。」と復活を頑なに疑うトマスには、

「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。

手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。」と、釘と槍で刺されたご自身の手とわきを示されました

(ヨハネ 20:27)。

こうしてイエスさまは死者の中なら復活なさいました。

復活と蘇生は違います。

仮死状態から蘇生しても、またいつかは死にます。

病気になったり、事故に遭ったり、あるいはそうでなくとも年をとって寿命が来れば、必ず死ななければなりません。

でも、復活は違います。

復活は死ぬことがないのです。

一度死んだので、もう死ぬ必要がありません。

これが決定的な違いです。

イエスさまは、十字架で死んで三日目に復活し四十日間弟子たちに現れた後に、また再び死なれたものではありません。

イエスさまは、弟子たちが見つめる中、天に引き上げられて行ったのです。

そして、それから、

天の御国で父なる神さまの右の座に着いて、

弟子たちの救いのためにとりなし祈り(ローマ 8:34)、

世界中で宣教する弟子たちと共に働かれて(マルコ 16:20)今日に至ります。

つまり、イエスさまはこの世のいのちをもってよみがえられたのではなく、永遠のいのちをもってよみがえられたのです。

イエスさまが十字架で死なれたのは

私たちが世の終わりに受けるべき「最後の審判」による死でありましたが、

その後起こる復活は、最後の審判を終えた後に到来する新天新地のいのちです。

それはもはや神さまにさばかれることのないいのちです。

二度と死ぬことのないいのちです。

一度神の怒りを受けて神に見捨てられて死んだので、もう死ぬ必要がありません。

絶対に死ぬことのないいのちです。

これがイエスさまの復活なのです。

そして、このイエスさまの復活は、

やがて同様に復活することになる私たちの初穂としての復活でもありました。

イエスさまを信じる私たちは、

やがて世の終わりの日に、イエスさまが死人の中から復活なさったように復活するのです。

今日の、コリント人への手紙第一の15章は、

使徒パウロがイエスさまの復活を論じる場面です。

パウロはまず復活の主イエスさまが弟子たちに現れた後に自分にも現れてくださった結果として

「他のすべての使徒たちよりも多く働く」ことができたと告白します。

そうして、(当時疑う人の多くいた)「死者の復活」について論じるのです。

50節以降は一連の「死者の復活」論の締めくくりとなります。

パウロは言います。

50．兄弟たちよ。

私はこのことを言っておきます。

血肉のからだは神の国を相続できません。

朽ちるものは、朽ちないものを相続できません。

それは「穀物の種粒」(37)がそうであるように、

神さまに造られたままの生まれながらの「血肉のからだ」はそのまま神の国を相続するものではありません。

一度死んで滅びなければならぬのです。

死ぬべき「朽ちるもの」は、一度死んで滅びてから、死なない「朽ちないもの」によみがえらなければなりません。

パウロは、それが「世の終わりのラッパとともに」起こると言います。

しかも「たちまち、一瞬のうちに」です(52)。

51．聞きなさい。

私はあなたがたに奥義を告げましょう。

私たちはみなが眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。

52. 終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。

ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

こうして「死ぬもの」は「不死」を着、「朽ちるもの」は「朽ちないもの」を着ます。

53. 朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、

死ぬものは、必ず不死を着なければならないからです。

私たちが不死身の復活のからだによみがえることを、ここでパウロは「着る」と表現します。

これはとても興味深い表現です。

着る本人は変わりませんが、

着る「服」は新しい服だというわけです。

あるいは、新築の「家」に引越すと言い換えても構わないでしょう。

田舎から出てきた如何にも田舎臭い女の子が、ある時突然現代風都会風の服装を身につけて、変身するのです。

この春新たに神学校に入学した金 善州姉妹のように、

朝から晩まで聖書と神学の勉強に明け暮れる神学校の寮生活に引っ越すのです。

全く新たな世界に飛び込みます。

そこには大きな希望と喜びがあります。

そうした飛び上がりたくなる様な復活の喜びと希望をパウロは「朽ちないもの」「不死」を「着る」と表現したのでした。

考えてみますと、

イエスさまも、復活なさった時、何か他の誰かに生まれ変わったわけではありません。

その風貌は確かにイエスさまのそれでしたし、両手両足には釘の跡が残っていました。

しかし、マグダラのマリアとエマオ途上の二人の弟子は、

復活のイエスさまに面と向かって会話をしているにも拘わらず、

しばらくはそれがイエスさまとは全然わからなかったのです。

ずうっと顔を合わせているのですよ。

そして、会話しているのです。

食事まで一緒にして。

それなのに、イエスさまとはわかりませんでした。

どうしてでしょうか。

イエスさまが復活のからだによみがえっていたからです。

具体的にどう変化していたかは記述がないのでわかりませんが、

輝きを放っていたのか、白い衣を着ていたのかわかりませんが、とにかく不死身の復活体によみがえっておられました。

もはや死ぬことのない、

神のさばきを受けることのない、

最後の審判を終えた後の新天新地に属する、

罪の力を無効にして死を飲み込んでしまった復活体によみがえっておられたのです。

パウロは、復活の体によみがえることを、

旧約の預言の表現を借用しながら「死を飲み込む勝利」と表現します。

54 . しかし、

朽ちるものが朽ちないものを着、

死ぬものが不死を着るとき、

「死は勝利にのまれた。」としるされている、みことばが実現します。

55 . 「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。

死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」

56 . 死のとげは罪であり、罪の力は律法です。

私たちにとって、死は最も恐ろしいものです。

どうして恐ろしいのでしょうか。

聖書によれば、死とは、私たちの罪に対する神の怒り、審判であるからです。

神のさばきです。

最後の審判のさばきです。

私たちは、本来、自分の罪深さの故に、

何の助けもなく、永遠に神に見捨てられて、

「わが神、わが神、どうして私を見捨てたのですか。」と永遠に地獄で叫ばなければならない者です。

これが「死」というものの本質です。

死とは、言うなれば「死刑」に他なりません。

だから、恐ろしいのです。

考えたくもないし、私たちはあまりの死の恐ろしさに、まともに死と向き合うことができません。

でも、キリストは、

私たちの身代わりに神の律法をことごとく全うして、私たちの身代わりとなって十字架で死なれました。

私たちの代わりに神のさばきを残らず受けて、私たちの罪を贖ってくださいました。

このことにより、死は恐ろしいものではなくなりました。

なぜなら、キリストによる罪贖われた者にとっては、死はもはや神のさばきではなくなったからです。

それは、永遠のいのちへの第一歩となりました。

死は、地獄の門ではなく、天国の門となりました。

「死は勝利にのまれ」たのです。

神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。 (57)

最後に、パウロは、「死人の復活」の教理の結論を述べます。

58 . ですから、私の愛する兄弟たちよ。

堅く立って、

動かされることなく、

いつも主のわざに励みなさい。

あなたがたは自分たちの労苦が、主にあってむだでないことを知っているのですから。

これがこれまで展開してきた「死人の復活」の教理の結論です。

「**堅く立って**」とは、元々の意味は「じっと座っている」という意味です。

「**動かされることなく**」は文字通り「動かす」の意味です。

どんなことがあっても、
復活の教理の上にどっかりと腰を下ろして、座り込んで、
殴られても、蹴られても、そのままじっと動かないでいるという意味です。

昔も今も、信仰の生涯につきものなのは、犠牲と迫害と困難です。
場合によっては、死を覚悟しなければならない時もあるでしょう。

(退職金を全部使い切った)小林伊佐美先生のように、ある人は自分の財産を主のために犠牲にし、
(八木神学生や金 善州神学生のように) 　　　　　　　　　ある人は自分の人生を主のために犠牲にし、
(朱基徹牧師のように) 　　　　　　　　　　　　　　　　　ある人は自分のいのちを主のために犠牲にするかも知れません。

真面目に主に従っているのに、何でこんな目に遭うのか、と思うようになるかも知れません。

神さまの働きをしているのに、どうしてこんなに大きな困難に直面するのか、と思う時もあるかも知れません。

主に従えば従うほど、損をし、犠牲を払い、死を覚悟しなければなりません。

もうやめようか、適当に、いい加減に、手を抜いて、やろうか、と思うようになるかも知れません。

いい加減に、適当に献金して、適当に教会に来て、

適当に奉仕して、適当に伝道して、適当に当たり障りなくやり過ごそうかと思うかも知れません。

しかし、パウロの教えはそうではありません。

彼は、コリント教会の信者たちに、

「堅く立って、

動かされることなく、

いつも主のわざに励みなさい。」と教えます。

いかなる犠牲や困難や死をも恐れることなく、

いつも揺るぐことなく、主のわざに励め(富め、溢れよ、豊かになれ、有り余れ、増せ、あふれさせよ)と言います。

つまり、キリスト者としての働きの規模を縮小させることなく、どんどんやれ、と言うのです。

臆することなく、恐れず、大胆に、大いに、思いっ切り、悔いなくやれと言うのです。

なぜなら、たとえ死んでもよみがえるのだから、というわけです。

この復活の信仰こそは、初代教会の力でありました。

そして、(他の使徒たちよりも多く働いた)使徒パウロの爆発的な伝道の源でありました。

使徒たちは、少し前には全員逃げたのです。

死が怖かったからです。

彼らの行動原理の基準は、自分が損するか得するか、死ぬか生きるかでありました。

でも、今は、生きるか死ぬかは問題でなくなりました。

死んでも生きても、ひたすら主のみこころを行うようになったのです。

主のみわざに励む（あふれさせる、豊かに、大いに）ようになったのです。

キリストにより罪贖われた私たちは、不死身の復活体によみがえります。

そして、復活の望みに生きる私たちは、

このパウロの教えの通りに、

復活の望みの上にどっかりと腰を下ろして、

揺るぐことなく、

あらゆる困難を耐え忍んで、

如何なる犠牲や困難や死をも恐れることなく

語るべきを語り、なすべきをなして、

死人を復活させる神さまを信じて、

後先考えずに、

キリストのみこころをひたすらになし続けて行きたいと願います。